

第1回インフラツーリズム有識者懇談会

平成30年11月9日

【観光・地域づくり事業調整官】 定刻より少し早いですが、皆さんおそろいでございますので、ただいまより第1回インフラツーリズム有識者懇談会を開催させていただきたいと思っております。

本日の進行を務めさせていただきます総合政策局公共事業企画調整官の菅でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、冒頭、挨拶までカメラ撮りがございますので、希望された報道関係者の方々は、撮影をお願いいたします。

それでは、懇談会の開催にあたりまして、総合政策局長の栗田より、一言ご挨拶を申し上げます。

【総合政策局長】 栗田でございます。

委員の皆様におかれましては、本日は大変お忙しいところお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

観光はまさに地方創生の切り札と我々は考えています。観光産業を我が国の成長に資する基幹産業にするために、政府全体で取組を進めています。その中で、魅力あるインフラの公開・開放として、インフラツーリズムについて積極的に取り組んで、5年が経過しております。宮ヶ瀬ダムの観光放流には年間10万人が訪れ、多くの来訪者を集める魅力的な施設も増えてきております。一方、インフラの魅力をも十分に生かしていない施設も多数存在していると思っております。このため、本懇談会を立ち上げまして、インフラツーリズムの付加価値を高め、さらに拡大させることによりまして、成長産業にしていくことを目指して、今後の取組の方向性について検討することとしたところでございます。

インフラを観光資源として活用するインフラツーリズムを全国で拡大していくためには、地域や民間と連携して、地域と一体となって観光資源に磨き上げ、地域活性化に資する新たなインフラツーリズムに育てて、実際のものとして展開していく必要があると思っております。

本懇談会では、これまでの取組、課題を把握して、今後の方策を幅広くご議論いただき

たいと考えております。委員の皆様には、忌憚のないご意見を頂戴いたしますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

【観光・地域づくり事業調整官】 ありがとうございます。

続きまして、本懇談会の委員の皆様のご紹介をさせていただきます。資料1の最後に委員名簿がございますので、そちらと併せてご覧ください。委員名簿の順に、ご紹介させていただきます。

阿部貴弘委員でございます。

【阿部委員】 よろしくお願ひいたします。

【観光・地域づくり事業調整官】 河野まゆ子委員でございます。

【河野委員】 よろしくお願ひいたします。

【観光・地域づくり事業調整官】 篠原靖委員でございます。

【篠原委員】 よろしくお願ひいたします。

【観光・地域づくり事業調整官】 清水哲夫委員でございます。

【清水委員】 どうもよろしくお願ひいたします。

【観光・地域づくり事業調整官】 なお、行政側の参加者は、お手元の配席図にかえさせていただきます。

次に、お手元に配付しております資料のご確認をお願ひいたします。配付資料につきましては、次第の下のところに一覧として載せておりますので、資料に不備がございましたら、事務局までお申しつけいただきたいと思ひます。

続きまして、本日は第1回の懇談会となりますので、設立趣旨（案）、規約（案）について、事務局より説明をさせていただきます。

【事業総括調整官】 では、資料の説明をさせていただきます。事務局をしております公共事業企画調整課で事業総括調整官をしております吉田と申します。よろしくお願ひいたします。

お手元の資料で、右上に資料1と書いてあるものがございます。こちらは3枚物になっておひまして、まず1枚目ですが、今回のインフラツーリズム有識者懇談会の設立趣旨の（案）というものをつけておひます。ざっとポイントでご紹介させていただきますと、インフラを観光資源として活用できる地域固有の財産として捉えて、観光産業を今後我が国の成長に資する基幹産業としていくために、魅力ある公的施設・インフラの大胆な公開・

開放として、これまでもインフラツーリズムについて積極的に取り組んでいるところです。

今後、さらにその付加価値を上げていくために、本懇談会は、インフラを観光資源として活用するインフラツーリズムの付加価値を高め、地域や民間と連携した新たなインフラツーリズムに育て、展開していくために必要な方策について、幅広く議論することを目的として設立することを設立趣旨として考えております。

1枚おめくりください。この懇談会の規約の（案）でございます。ポイントになりますところは、第3条に委員ということで、別紙のとおりということで次のページになりますが、本日ご参加の先生方に委員をお願いしたいと考えております。

また、第4条、委員長でございますが、懇談会に座長を置き、座長は、事務局の推薦及び委員の確認により定めるとしております。

第6条は議事の公開で、懇談会は原則として公開とするということで考えております。こちらをご議論いただいて、お認めいただけたら、本日から施行するというように考えております。

以上でございます。

【観光・地域づくり事業調整官】 今説明させていただきましたが、設立趣旨（案）及び規約（案）につきまして、委員の皆様、よろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

【観光・地域づくり事業調整官】 ありがとうございます。それでは、議事に先立ちまして、規約第4条の2に基づき、事務局より、座長の推薦をさせていただきます。

【事業総括調整官】 本日ご参加の委員の先生の中で、座長として、公益社団法人日本観光振興協会総合調査研究所の所長を務められていて、観光行政に広く精通しておられる清水委員をお願いしたいと思っております。

【観光・地域づくり事業調整官】 委員の皆様、よろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

【観光・地域づくり事業調整官】 ありがとうございます。委員の皆様のご了解がいただけましたので、清水委員に座長をお願いしたいと思います。

それでは、清水座長から、一言ご挨拶をよろしく願いいたします。

【清水座長】 どうも皆さん、おはようございます。今、座長に指名されました首都大学東京の清水と申します。良いインフラツーリズムの取組が今後続いていくように微力を

尽くしたいと思います。

最初に、私から一言、コメントを申し上げたいと思います。私ごとですけれども、もともと土木工学を修めまして、今は観光科学で教鞭をとっています。その意味で言いますと、土木の事情と観光の事情、この両方からインフラツーリズムがどうあるべきか深く考えたいと常々思っています。ここまで5年間、いろいろな方のご努力が結集して、ポータルサイトもできたり、各地でいろいろなインフラツーリズムの取組、新聞でも定期的にインフラツーリズムの記事が出たりして、隔世の感があると個人的には思っておりますが、厳しい目で見ますと、インフラのPR、それから、社会科見学とインフラツーリズムは何が違うのかが、数が増えてくると、だんだん認識をしなければいけないことが今抱えている課題と思っています。今回議論する内容も、多分、こういうところが論点になってくるだろうと座長としては考えているところです。

ポイントは3つありまして、1つ目は、資源性というか、観光資源としてどうなんだということを、きちんと観光学の理論的な背景からきちんと整理をすることが、まずは重要だろうと思っています。

2点目は、先ほど設立趣旨でもございましたように、インフラ資源をツーリズムとして展開していく上で、地域の協力が欠かせないということで、地域組織、それから、その中の担い手。担い手も、運営するのが誰かという点と、それから3点目のガイドですね。ここはが多分一番頭が痛いと思うんですけれども、どういう方にインフラツーリズムの魅力を伝えていただけるかが、今後、広範にインフラツーリズムを展開していく上で重要になるのではないかなと思っております。

ちょっと長くなりましたけれども、座長としては、こんなことを思って、この審議に参加したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【観光・地域づくり事業調整官】 清水座長、ありがとうございました。

それでは、冒頭のカメラ撮りはここまでとさせていただきますので、撮影を終了していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

(カメラ退室)

【観光・地域づくり事業調整官】 それでは、議事に移らせていただきます。

以降の進行は、清水座長にお願いしたいと存じます。清水座長、よろしくお願いいたします。

【清水座長】 それでは早速、議事に入らせていただきます。

まず初めに、議事の（１）ということで、インフラツーリズムのこれまでの取組と課題について、事務局より、ご説明をお願いいたします。

【事業総括調整官】 資料２と書いてある綴りをご覧ください。

インフラツーリズムのこれまでの取組と課題ということで、現状と課題の分析と、今回の懇談会で論点としていただく案を、ご説明させていただきます。１枚おめくりください。

１、２、３とありまして、まず、１のインフラツーリズムのこれまでの取組から、ご紹介させていただきたいと思います。

３ページをごらんください。インフラツーリズムのこれまでの取組といたしまして、大きな流れといたしましては、平成 19 年に観光立国推進基本法、観光を 21 世紀における政府の施策の重要な柱として位置づけた法律が制定されています。平成 25 年には、観光立国推進関係閣僚会議の中で、観光立国実現に向けたアクション・プログラムというものが策定されていて、この中で、インフラツーリズムの概念が打ち出されているということです。ここから 5 年ということで、今動いてきているということです。平成 30 年にも、観光ビジョンの実現プログラム 2018 というものがつくられていまして、魅力ある公的施設・インフラの更なる公開・開放に向けた重点施設・インフラが掲載されているような状況でございます。

国土交通省としてのインフラツーリズムのこれまでの取組は次のページになります。平成 25 年以降から、インフラツーリズムという取組は全国各地で進んできていて、そういったものを一元的に情報発信していく場として、平成 28 年 1 月からポータルサイトを開設して、四半期ごとに旬なツアーを公表して、多くの方々に利用していただきやすいようにしていたものでございます。旅行会社等と施設管理者が調整して、民間が主催するインフラツアーというものも年々増加してきています。下のグラフでいきますと、上の青線がポータルサイトに取り上げられている現場見学会の件数で、当初の 246 件から、現在では 350 件を越す数になっています。民間が主催するツアーが赤線になりまして、当初 3 件ぐらいだったものが、現在では 41 件ということで、年間の民間が主催するツアーになりますと、平成 28 年度は 32 件、平成 29 年度は 80 件ということで、民間の方々との連携も、どんどん広がってきているという状況でございます。

次が 5 ページになります。そういったインフラツーリズムポータルサイトの中で、どの

ような施設をインフラツーリズムで取り上げてきているのかというところを整理しております。左の縦にある15の分野が国土交通省が所管するインフラの大まかな分野でございます。右に、その他の施設等と書いてありますが、道の駅とか、みなとオアシスとか、これはもともと観光そのものが目的になっているようなところで、インフラツーリズムポータルサイトとしては、左側に入れている、特にインフラそのものを見るというものをメインターゲットにしているものを主なインフラツーリズムとして、これまでご紹介してきたということでございます。

次のページをご覧ください。インフラツーリズムのこれまでの取組の中で、四半期ごとの情報発信と、併せて、全国のツアーの中で代表的なものについて、幾つかの分類をして、パネルをつくって、平成27年から、いろいろなところでパネル展も開催してきているというものです。テーマごとの分類ですけれども、次のページと併せて見ながら聞いていただけるといいかなと思っています。今、写真で表示しておりますA、B、C、Dとついておりますが、テーマとしては、9つの分類があります。Aが風物詩を彩るということで、この写真の中では、山梨の笛吹川の鶴飼の状況等をご紹介しています。Bが歴史的遺産ということで、長良川と木曾川をつなぐ船頭平閘門をご紹介しています。Cが年に一度だから楽しいということで、時期を限定した紹介ということで、北海道の知床横断道路の雪の壁をご紹介しています。Dが観光名所ということで、以前、車のCMでベタ踏み坂として取り上げられた鳥取の境港の江島大橋、こういったところもご紹介をしています。アイデア勝負というところでは、青森の津軽ダムですが、水陸両用の車両をインフラツーリズムに活用しているということでこういった紹介。Fが今が旬です！ということで、事業のいろいろな断面でご紹介しているケースとして、相馬福島道路の建設中の状況をご紹介しています。Gが地域に根付くインフラということで、インフラとしては、供用が始まってからかなり期間も経っているんですけども、この天ヶ瀬ダムのケースだと、放流とライトアップをあわせてやっているというようなところで、供用中のものが地域と一緒に取組んでいるとか、あとはレアもの・秘境・再発見の六甲砂防とか、鹿児島島の桜島のところ、現地に行くと、単に観光だけではなくて、火山に関する勉強もできる場、そういう9つの視点で、これまではご紹介をしてきたというところでございます。

次の8ページでございますが、こういった取り上げてきた施設にどれくらいの方々が訪れているのかというのを整理してみました。今まで、あまりこういった数字の整理を行っ

ていなかったもので、今回の委員会で初めて求めさせていただいたということになっています。ポータルサイトで取り上げた施設の見学者を平成 29 年度でまとめたものが左側のグラフになります。これが大体、160 万人となっています。分野ごとに、円グラフで何%かというものと、その分野で何千人かということでご紹介しています。特に多いのが航路標識、これは灯台ですね。全国 17 の灯台で歴史的遺産として開放されているものに多くの方々が来ているというものと、港湾という緑色のところがあるんですが、これは大阪湾の湾内クルーズが 39 万人の中の 38 万人ぐらいを占めていて、有料でのサービス等を行っているといったような取組も進められています。こういった全体の取組の中で、今ご紹介した灯台、湾内クルーズが 112 万人ぐらいいるんですが、ここは近年では既に観光と一体となって運用されているところだと考えています。事務局としては、今回の懇談会で、主に観光資源として、今後、活用の拡大を検討していく部分はどこかと考えておきまして、灯台、クルーズを除いたところで、今後、より活用の拡大を検討していくべきではないかということで、右のグラフの中に、そこを除いた数字として入れております。ここを見ると、約 46 万 7,000 人、約 50 万人ということで、今回の議論としては、主に、この右の 50 万人のところを対象として、ご検討いただければどうかと考えているところでございます。

次のページは、参考までに、施設の数ではどういったような割合になるのかというのをまとめております。ポータルサイト全体では、左のグラフにある 385 施設が取り上げられている状況になります。先ほどご紹介した灯台は 17 施設で、湾内クルーズは 1 施設ですので、先ほどの 50 万人が幾つぐらいの施設なのかということになりますと、右のグラフにあります 367 施設ということで、全体として、施設の数としては、ほぼ、ボリュームとして、大きい部分を押さえてご議論いただけるのではないかと考えてございます。

次がインフラツーリズムに対するさまざまな方の意識を調べてみましたというところでございます。

11 ページは、この 7 月にウェブアンケートを行っております。1,000 人の方に答えていただいているんですけども、「インフラツーリズムという言葉を知っていますか」という質問に対しては、「知っている」という方は 16%にとどまりました。ただ、「インフラ施設を見学したいと思いますか」という質問をさせていただいたところ、「見学したい」とおっしゃる方が 72%いたということで、知っている人、知らない人で分けると、インフラツーリズムを知っている人の 94%は「見学したい」と思っていますが、インフラツーリ

ズムという言葉が知らなくても、約7割の人、68%の方が「見学したい」と思っているということがわかったというところでございます。

次が、インバウンドの観点で、訪日外国人の方にもヒアリングをして、インフラに観光として行ってみたいと思いますかということをお願いしたところなんです。行ったのは、これも今年の7月で、場所は東京駅のKITTEの施設の地下に東京シティアイというスペースがあります。ここで外国語に対応したスタッフが、訪れた外国人、約60名の方に意見を聞いたものです。状況は、この写真にありますとおり、インフラツーリズムの写真、パネル等を多数貼って、「こういったところに行ってみてみたいですか」ということを聞いたものです。お伺いさせていただいた方々の中で、87%、人数でいうと55名の方は、「インフラツーリズムに興味があり、行ってみたい」とおっしゃっていただいたというところでございます。以上が現状の分析でございます。

ここからは課題ですけれども、1ページめくっていただきまして、今後、インフラツーリズムを現状より拡大していくといったときに、こういったところが課題になるかというのを、これまでのアンケート調査とか、先ほどご紹介した観光ビジョンの中でこういったことが書かれているかというところで整理をしております。広報周知、どのように知らせていくかということと、2番目が施設の見せ方、公共施設をどのような形で見せていくのか。3番目が地域につなげていくために地域との連携をどのようにしていくのか。あとは、こういった取組を継続させていくための持続性の確保をどのようにやっていくのか、大きくは、この4点ではないかと考えております。

次のページでございますが、こういったインフラツーリズムを拡大していく際に、もともとが公共施設としてのインフラですので、施設管理者としての観点も必要ではないかと考えております。こちらについて、施設管理者に対するアンケートを行ったところ、やはり、多くのお客さんが来るようになると、対応する要員をどう確保していくのかということと、見に来ていただいたお客様、参加していただいている方々の安全性の確保と、あとは人が入っていく際には、動線の確保とか、お手洗い、駐車場、安全施設、こういった受入環境を整備していく、この大きく3点が課題ではないかということが挙げられているところでございます。

以上のようなところで、今後のご検討いただく論点を整理しておるところでございます。ご紹介させていただきました現状と課題を踏まえますと、現状としては、さまざまな施設

の公開が進んでいて、訪れる方々も増えてきている状況です。さまざまな分野の施設があって、今後、広報の仕方、施設の見せ方、地域との連携、持続性の確保など、上げていく上での課題や、受入施設として、対応要員、参加者の安全の確保、受入環境の整備などがあるのではないかとこのところでございます。

次のページに、そういったことを踏まえまして、論点として、大きく3つ挙げさせていただいております。1つ目は、アンケートをとった結果でもわかりましたように、インフラツーリズム、言葉自体は認知度があまり高くないところでございます。集客が多い施設というのも、今のところ限定的な状況になっていますので、より多くの方々に知っていただいて、訪れていただく。広報を強化して、全国各地でインフラツーリズムの好事例を増やすにはどういった取組が必要か、これが1つの論点と考えております。

2つ目は、インフラツーリズムとして活用している施設には、さまざまな種類、段階、規模のものがあり、こういったところで、それぞれレベルアップしていくために、手引き、ガイドのようなものをつくっていく必要があるのではないかと考えておるところですが、その中にどのような項目を盛り込んでいくべきかというところでございます。

また、これまでインフラツーリズムとして施設ごとに頑張ってきたところはあるんですけども、地域に波及効果があるというところで捉えると、あまり多くはなかったというところもあると思いますので、地域の観光資源として活用していくためにはどのような取組が必要かというところが、もう1つの論点として挙げられるのではないかとこのところでございます。

以上、現状、課題の分析と、そこから、今後ご検討していただく上での論点の案を考えてみましたので、こちらについてご議論いただければと考えております。よろしく願いいたします。

【清水座長】 どうもありがとうございました。ただいま事務局から、これまでの取組と今後の課題のご説明がございました。まずはこれを中心に、大体30分程度時間をとりまして、議論したいと思います。ご質問、ご意見等、ご自由に。まずは、特に何か方向性を示させずに承るということで、よろしく願いします。

まず確認として、この懇談会のアウトプットとして定義をつくるということなので、そこにつながる議論になるということですね。

私から質問ですが、12ページで、外国人の方に調査をされたということですが、具体的

にどういう説明をして、どんなものを見せて、「興味がある」となったんですか。

【観光・地域づくり事業調整官】 具体的なやり方としては、あまり多くの質問をする
と、なかなかご意見がとれないだろうということで、シティアイの五、六人のいろいろな
言語に対応できるスタッフの方に、大体、5項目ぐらい、まず、今日お見せしている関心
度を確認するということと、この写真では見えにくいんですけども、このような形で、
全国的にこういう代表的な箇所がありますという写真、例えば、ダムだったり、橋だつたり、
いろいろお見せして、その概要をご説明した中で、関心度ということと、例えば、
施設も何種類かつけておりましたので、施設なり、あとは日本の技術みたいなところにご
関心があるかみたいなところをお聞きしたところでございます。インバウンドの関係につ
きましては、もう少し、今後、詳細な調査をしていきたいとは思っておりますけれども、
まずはニーズとしてどうかというのを今日お示ししたいと思ひまして、そのような調査を
させていただきました。

【清水座長】 「興味がある」87%をどう捉えるかということで。インフラツーリズム
に参加する機会があつて、それがそれなりにリーズナブルで、魅力があれば行ってみたい
という意味での87%だと理解します。ただ、もうちょっと細かく考えていったとき、今回
の調査は重量級のものを見せていると思うので、軽量級の対象を見せたときに、周りで何
も楽しめないよねという状況になったときには、興味があると答える割合は下がると思
うんですよ。87%をどう捉えるかというのは、もう少し深読みしたほうがいいと思ひます。

【篠原委員】 跡見女子大の篠原でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず、私の過去のインフラツーリズムとの関わりを冒頭お話しさせていただこうと存じ
ます。今からちょうど10年ほど前ですけども、以前、事業総括調整官をされておられま
した佐藤寿延さんが湯西川ダムの所長でおられた時代に、水陸両用車を関西から持ってき
たいというご相談をいただきまして、その運行と、そして、湯西川温泉という山深い温泉
地、疲弊しておるものをどうやって有効化させようか、まさに考えてみると、その時代、
インフラツーリズムというはしりがあつたのかと思ひます。

そして、局長のお話に出てまいりましたように、5年前ぐらいから、いろいろと調査を
いただきまして、パネル展示とか資料がつくられて、ダムツーリズムなどを中心にして、
今に至っていると思ひます。

今、清水座長のお話がありましたように、やはり今後の観光を考えますと、インバウ

ンドの部分というのも非常に有効な手段でございますし、一例を申しますと、これも七、八年前になるんですけれども、しまなみ街道がございます。私、当初、観光庁からご相談いただいて、集中しているゴールデンルートから分散させるために、新ゴールデンルートをつくりたいというお話で、現状の京都、大阪から先、広島までつなげて、その後どのように分散させるかというときに、しまなみ街道を渡って愛媛県に入り、そして、今度、道後温泉までつなげよう。これは非常に成功したんですが、成功した背景の1つの要因は、やはり、インフラの見方が外国人には非常に新鮮だったということですね。自国の建築物を見ている彼らからすると、我々は大分見なれてしまっているんですけれども、大変な脅威だったようでございます。日本の土木技術の深さといいたいまいしょうか、長い間の島々を縫うようにしたあの橋の景観、そしてまた、あのとき観光的な要素を提案したのを覚えているんですが、そこにサイクリングをつなげていたらどうだということで、サイクリングステーションのフォローをするような仕組みと、言語の部分をうまくつなげていったときに、今のしまなみ街道と新ゴールデンルートが成功している。ですから、さっきの清水座長のお話のように、あんまりがちっとした構造的なものだけでなく、地域資源とか特殊性を、顧客価値といいたいまいしょうか、その辺とどうつなげられるかということが、今後の発展の要因ではないかなと思うわけでございます。

お示しさせていただいた資料がございまして、お手元に配付されていると思います。この間、事務局がお越しになられたときに、資料をお示ししようと思ってお願いしております。篠原からの情報提供という資料でございます。最近、各紙から、インフラツーリズムというご興味が増えていると思ひまして、いろいろな投稿を依頼されております。

2ページ目、これは建通新聞さんの土木のほうの新聞で、「インフラは地域を動かすだけでなく、人の心も動かせる」という、いいタイトルをつけていただいたんですけれども、ちょうど昨年でございますが、国土交通省と地元の関係が非常によくないまま、65年間の歳月が過ぎてまいりました八ッ場ダムでございますが、あと1年で完成になるわけでございます。その中で、結局、現地事務所が撤退した後に、地域が自立をしていくためにどうしたらいいかということで、水局を含めて、大変、課題だったわけでございます。地域の方々からは、憎むべきダムが観光資源になんかなってたまるかというお話があったんですが、よくよく入って、地域とダムをつなげていくストーリーを考えていったときに、やはり、地域の方は、自立をするための欲求というんでしょうか、これは非常に強かった

ということは私も驚いたんですけれども、ダムをはじめ、インフラが疲弊している地方も多いわけですから、地域の資源としてインフラをどのように活用したいかという入り口がわからないだけで、きちんと地域の観光と、こうしたインフラ資源をどうつなげたらいいかというサジェスションをきちんと示してあげていったときに、可能性として、非常に深く掘り下げられるのではないかなとも思うわけでございます。

そして、もう1つ、裏側を見ていただきたいんですけれども、実は八ッ場の後に、これも国交省から依頼を受けまして、今、九州地整の管轄で8月に着工したダムがございます。立野ダムでございますが、南阿蘇村が、地震の後、観光復興に大変苦勞しているわけですが、新たに地域資源とダムをつなげていくような仕組みの中で、日本航空を巻き込んで、東京発のダムと地域資源をつなげるようなツアーを定例的にやっていくことになりました。着地型商品として、このダムツアーを現地で受けていただくことになりまして、来年の春以降のオプションとして、JALでPRしていくような取組も、先ほどのお話と同じようにつながってきています。

そして、次のページ、首都圏外郭放水路でございます。これも関東地整からのご要請でございまして、今までのインフラをもっともっと活用していくにはどうしたらいいんだろうというご相談を受けたわけです。当初は民間開放にというだけだったんですが、民間開放を民間委託で運営するという話ですが、その受け入れ方を新たにつくるだけでなく、一番ポイントは何かといいますと、下に書かれておりますプレミアの1から8までございますが、先ほど局長のお話にもあったように、現状のインフラをどのような利用者視点で興味を持ってもらえるかということ。それをベースにして、安全性を確保しながら、人手をかけずに行っていこうということを試みたわけでございます。今では、陸の孤島だったこのエリアも、民間の路線バスをうまくつなげることに成功しまして、車でしか行かれないお客様が自由に入れるようになったわけでございます。

裏側を見ていただきたいんですが、これも有識者会議から提案いたしまして、具体的に有料化にもっていったわけでございます。1人650円の料金を取りながら、有料化に成功しまして、国交省の人件費の支出はゼロで、新たにこのような話で収益が出始めております。何とひと月1万人のお客様が8月、9月と続いておりまして、来年に向けまして、さらなる調整をしていこうということになっております。

そしてまた、地元は春日部市でございますが、ここの部分では、大夙といいまして、日本

でも浜松に次いで大きいのがあるんですが、こうしたことをきちんとつなげていき、隣町の岩槻のひな人形、そして、そのまた隣の大宮の盆栽村、こうしたこととつなげながら、日本の土木技術をインバウンドにもつなげていきたいという構想で、今、関東地整と一緒に動いているということでございます。

そして、最後に出ておられますのが、やんばツアーズでございます。先ほどちょっと触れたやんばツアーズでございますが、これも全国共通で言えると思うんですね。一辺倒のご案内の仕組みだけではなくて、旅行の形態はまず2つ、団体なのか、個人なのかがありまして、それを解説していくときのシナリオ、楽しみ方が、全部違うわけでございます。要は、同じダムを見ながらも、10本の角度の違いでガイドをする仕組みができ上がってきておりました、当初、私どもが入ったときは5,000人だったものが、今5万人、最新の数字は7万人と聞いておりますけれども、今、大ヒットして、地域の経済にこのダムが繋がったということがございます。

長くなりまして済みません。このようなご披露をさせていただきます。

【清水座長】 ありがとうございます。今のご説明も含めまして、先ほどの事務局からの説明の質疑を引き続き受け付けたいんですが、いかがでしょうか。

お願いします。

【阿部委員】 日本大学の阿部と申します。よろしくお願いいいたします。

私も清水先生と同じ土木工学科出身でして、何だか最近、インフラツーリズムというのがやり始めているというのを、もともとインフラの専門ですから、何がおもしろいのだろうと思いつながりながら傍観しておりました。現在、私が所属しておりますのが、まちづくり工学科とあって、幅広くまちづくりを取り扱う学科でして、その中で、せっかくインフラツーリズムが盛り上がっていることだし、まちのどこにでもインフラがあるわけですから、それをうまくまちづくりにつなげていけないかということで、“ツアー”というよりも“まち歩き”と言った方が良いかもしれませんが、身近なインフラを解説して歩くようなことを五、六年やっております。参加してくださる方は、身近なインフラについて解説すると結構喜んでいただいて、悲しいかな、学生よりもよく話を聞いてくれるような状況でして、そういったところに、インフラツーリズムの本質というか、何が人を引きつけているのかという魅力が見いだせるのではないかと思いつながりながら、インフラツーリズムというものに向き合っています。

先ほどご説明いただきましたさまざまな課題のなかで、インフラツーリズム全体の課題と、管理者サイドとといいますか、受け入れサイドの課題を挙げていただいております。これには全く異論はないのですが、管見の限りではございますが、おそらく、これまでのインフラツーリズムというのが、どうも手段先行で進められてきたのではないかという印象を持っております。まずはインフラツーリズムをやってみようということで、手段が先行していく中で出てきている課題なのではないかなと見ております。

こうした課題を踏まえて、今回のような有識者会議が立ち上がるということは、一度立ち止まって、今までの取組を見直そうというのが大きな背景にあるのではないかと理解しております。そうした中で、有識者懇談会のアウトプットとして手引きを作成する際には、例えば、インフラツーリズムの好事例に係る手段を示す前段として、なぜインフラツーリズムに取り組むのかということ、当然、誰に向けた手引きとするのかということもございますが、管理者向けのメッセージとして、あるいは自治体向けのメッセージとして示した上で、施設や立地等の類型に応じた手段であるとか、あるいは好事例を示していく必要があるのではないかと考えております。本日を含めた議論の中で、そもそも“なぜインフラツーリズムに取り組むのか”という本質にかかわるキーワードが出てくればよいと思っております。

【清水座長】 ありがとうございます。

では、引き続き、お願いします。

【河野委員】 ありがとうございます。

今おっしゃっていた手段先行というところはまさに同感でして、これから、コンセプトなり、そもそも顧客に提供する価値とは何なのかということ、今年度、きちんと議論できればいいと思うのが1つと、もう1つは、現状分析をしていただいていますけれども、多分、これを手引きに落とし込んでいく際に、取組が進んでいるかどうかというステップだけではなくて、立地環境や、それだけで人を呼べるような第一級資源なのかそうではないのかという幾つかの軸で整理して考えていく必要があると思います。また、ツーリズムですから、急成長している八ッ場ダムの場合は、100万人を超える人たちがすぐ近所の草津に来ているという、極めて恵まれた環境が整っているということがあるとか、春日部の首都圏外郭放水路は国際的にも第一級の、世界に誇れるものであり、存在を知れば、来たい人は多くいる。一方で、既存の著名観光資源がないから、ダムを活用して一丁やってや

ろうかという地域もあるわけですね。観光資源なので、どうしても、立地や交通の便の悪さに訴求力は左右されます。それぞれのインフラのうち、どういうタイプのものがどのような活動をしていけば成功事例なのか、進んでいる取組と言えるのか。そういう切り口で整理していくと、手引きを作成していくときに、コバンザメ商法を必勝プランとする方もいるでしょうし、一方でまさに春日部のように、インフラを自分たちの地域の核として、周りも一緒になって連携して盛り上げていくんだというような地域もあるでしょう。自分たちの地域はどのパターンなのかというのが分かるような、資源の分類だけではない分類の仕方が必要ではないかなと思っています。

あと、日本人に対するアンケートで気になったところがありまして、「見学したいですか」と聞いているところに、既に思考の硬直が見られると感じます。インフラツーリズムを推進していくときに、これはこれからの議論ですけれども、ゴールは見学ではだめだと思うんですね。見学というのは今までの概念であって、見学して新しいことを知る大人の社会見学的な知的好奇心を満足させるようなコンテンツに魅力を感じる人はもちろんいますが、やんばツアーズのたくさんあるプログラムの中には、見学ではないものに魅力を感じて来訪している人ももちろんいます。そのような消費者の意識を変えていくようなメッセージを広報として行っていくということが、まず、インフラツーリズムを促進していく端緒となる時期の一番大事なことだと思っています。ですから、論点で挙げていただいていた広報周知の部分については、広報周知というものをブレイクダウンすることが必要で、認知度を上げたり、こんな場所があり、こんなことができるよということを知らせるだけでは不足します。どんなコンセプトなのかとか、単なる見学ではないどんな価値を提供できて、その体験をしたら自分の暮らしの中でどんなプラスがあるのか、どんな楽しみがあるのかというようなブランディングに近いようなことも一方でしつつ、情報を消費者に適切にリーチさせるように発信することも必要になります。この広報周知の部分を綿密に設計していくことが、今後、必要になってくるのかなという気がいたしました。

以上です。

【清水座長】 ありがとうございます。今、お二方からかなり本質的なコメントを頂きましたが、この段階で事務局からお答えすることはありますでしょうか。

【事業総括調整官】 この段階では特にはないです。

【篠原委員】 初回の会議でございますので、入り口をしっかりと確認したほうがいい

と思うんですね。インフラ観光は、やっぱり、今まで特殊なといひましようか、土木に興味がある方とか、ダムマニアという方が中心で動いていたマーケット、これが大分、広がりがつつあるわけですね。ですから、やはり、観光庁的な観点からこれを見ていくべきだと思っていて、観光立国の中の日本の観光コンテンツの奥行きを深さを示していくということだと思いますが、一番大切なことは、今後、マーケットを広げて、一般観光とつなげていくことを考えれば、ダムと地域資源をつなげていって、それで初めてダムに付加価値というのがついてくると思うんですね。したがって、地域創生の中で、ダムという一ダム以外のものでもいいんですが、インフラがどのように連携できるかというお話だと思います。八ッ場ダムの話、そして、立野ダムも同じですけども、ジオツーリズムといひまして、地形の観光の切り口がございしますが、まさに八ッ場のほうは、浅間山の噴火の部分のベースのジオツーリズムであり、そしてまた、熊本の阿蘇は、阿蘇のジオツーリズムのベースとなるのが立野峡谷であって、立野峡谷があり、そして、どうしてここにダムが建設されてきたのか。実は神話と一緒に解説しているんですよ。そのように物語性をきちんと一般観光につなげられるようなことを前提にした、例えばマニュアルだったり、そうしたような形につなげていくようにしないと、今までの延長線上のマニュアルといひましようか、ガイドブックのようなものでは、非常に今と変わらなくなってしまうから、そこを気をつけたほうがいいかなと思います。

【清水座長】 ありがとうございます。触発されたわけではないんですけども、お三方がおっしゃっていたことは、私も非常に同感で、事前に説明を受けたときに、大体そのようなことを申し上げていたと思います。やはり、まず理念といひましようか、何でインフラツーリズムをやるのかといひましようか、国交省的な立場もありますが、ツーリズムと称している以上、観光側の価値で判断されるべき話なので、結局インフラツーリズムは何をしたいのかがきちんと冒頭に整理されないと、多分だめだろうなと思います。河野さんのコメントは、私も同感で、単体でインフラツーリズムとして成立するところがどれほどあるのか。八ッ場はちょっと違うかもしれないけど、外郭放水路はうまくやれば単体でいけるかもしれない。基礎マーケットたる後背人口はすごく大きい。一方八ッ場は、多分、無理やり来てもらわないと厳しい立地だけれども、たまたま近くに一級の観光地があるかもしれないという環境が助けになるかもしれない。今回の手引きを一線級でないインフラ資源に向けて発信するとしたときに、このようなことを考えなければいけない。一線級のところは、

ひょっとしたら、手引きなんかつくらなくても、市場性と、そこに関わっている方の努力で何とかなるかもしれない。次のクラスに控えているところに対して、それを一線級に近づけるためにこの手引きを使うんですということだと思うので、それには相当な工夫が要るなと思います。

あとは、こうやってインフラ資源を仕分けていくと、残念ながら、市場性もだめで、やってもしょうがないのではないかとこのところが正直出てくるかもしれないですね。だから、ちょっと頑張れば何とかなるところをどうやって救うかというところに、ひょっとしたら今回の手引きの意味があるかなと思いました。

あとは、例えば、資源性としては期待できるけれども、危ないとか、現場の事情でだめというのものもあるかもしれないので、微妙なバランスで考えなければいけない話題だと、3人の先生方のコメントと私が常々考えていることと重ね合わせて思った次第ですね。

【篠原委員】 14 ページを見ていただきたいんですが、拡大に向けた課題の整理をいただいております、ちょっと私懸念するのは、手引き書をつくったとしても、それは実効性があるのかということも含めてのご提言でございますけれども、順番で、黄色のところですが、広報周知、次は施設の見せ方となっているんですが、民間のマーケティングと戦略でいきますと、まず、広報周知するとき、具体的にどのような成功事例があつて、形として、具体的に地域資源とつながりを持って動いているというような全国モデルのインフラツーリズムのところ、大体、今、5カ所ぐらいあるかなと思うんですけども、そのぐらいのこと。その次に、今後、重点的に伸びていきそうな施設はどこなのかということをしっかり分析をしながら、新しい見せ方の仕組みというものも、我々がある程度ベースを持った上でPRしていきませんか、インフラツーリズムということこれから攻めていくにあたって、今までと同じように一辺倒の、こんなことがあります、インフラツーリズム、観光のなんていう話ではなくて、具体化したシナリオを持った上で、整った上で、が一んとマスコミさんをお願いしていかないと、どうしても薄くなってしまふ。これはいつも感じるんですね。ですから、その辺のつながりを、全国モデルをきちんと選び、真ん中に位置する重点を選び、その後続くレベル、3つぐらいの段階をつくるような選定をしながらつなげていくということだと思います。

あとは、清水先生のお話に出てきましたが、そこを誰がどのようにご案内をしていくのかということとか、そうしたことの基本形をモデルとして示していければ、全国展開が広

がると思います。

【清水座長】 ありがとうございます。多分、次の議題にかかわるようなところに話
が移っていますので、事実確認として、資料2、あと、先ほど篠原先生からご紹介いた
だいた範囲で質問があれば受け付けて、なければ次に進みたいと思いますが、よろしいで
すか。

【河野委員】 はい。

【清水座長】 わかりました。それでは、次の議題に移りたいと思います。今後の方向
性ということで、事務局から説明をお願いいたします。

【事業総括調整官】 では、ご紹介させていただきます。資料2の現状の把握と論点の
ところで、今、非常に多くのご意見をいただいております。やはり大きく見ると、最後、
篠原先生がおっしゃったように、一辺倒にやっていくのではなくて、ターゲットを見きわ
めて、そのターゲットに合った方策で進めていくべきだし、特に重点化するものを見きわ
めて進めていくべきだということで、ご意見をいただいたかと思っております。

事務局といたしまして、では、どのような観点でターゲットを決めていくのかというこ
ろを考えているのが資料3でございます。インフラツーリズムの今後の方向性というこ
とで、1枚おめくりいただきまして、冒頭、ご紹介させていただいた中で、今後、観光資
源として活用を拡大していくところが、現状で約50万人ぐらい人が来ているというこ
とがありました。事務局としては、目標値を掲げて、それに向かって取り組むということで手
引きをつくっていったらどうかと考えております。ここに書いてありますとおり、平成29
年度で50万人だったものを、3年間、平成32年までの間に100万人、倍にするとしたら、
どういうところを取組んでいく必要があるのかということテーマに、ご検討いただい
てはどうかと考えているものです。これが1つでございます。

インフラの分類につきましては、先ほどの資料の5ページでインフラのリストをお示し
したところではございますが、もう1つ考えてみますと、インフラツーリズムというこ
とで紹介しているものには、インフラのライフステージの中で、いろいろな場面を活用して
いるのではないかと考えてみました。インフラのライフステージとは何かとい
うのをあらわしたのが2ページです。インフラをつくるにあたっては、やはり大きな施設
が多いので、計画をします。計画に基づいて工事をします。計画から工事まで時間が長く
かかるものもありますし、工事の時間が長いものもあります。早いものもあります。ここ

はさまざまです。工事が終わったときに、完成の瞬間というのを迎えます。完成の瞬間を迎えた後、供用ということで、インフラの数十年にわたる供用の期間というのは、大体ここで始まります。供用している中で、どんどん歴史が過ぎていって、社会がどんどん変わっていく中で、インフラが昔の姿を伝えているというような歴史的価値を持ってくるものも出てくるのではないかと考えています。あとは供用が廃止された後に、時間の経過とともに、だんだんと変わっていくインフラの様子を愛でるといような、廃止された後を見に行くといったこともあるのかなと考えております。計画段階としては、工事前の現場で将来を見据えたような形で公開をする。工事中は、まさに八ッ場ダムのように、今しか見られない工事現場ということで公開をする。完成のときには、よくいろいろなイベントがありまして、ウォーキングとか、完成イベントとかもあります。供用が始まると、定期的に開放して行って、外郭放水路もそうですけれども、供用が開始されてから、多くのお客さんが来られているとか、あとは歴史的施設ということで、土木遺産とか世界遺産クラスのものも今後出てくるのではないかと考えています。跡地を見ていただくというのがトンネル跡、観光で見ていただくといったものもあるのではないかと考えているということです。

3ページは、具体的に何かデータがあるわけではないんですけれども、大づかみに、今のライフステージということで見たときに、大規模な施設、身近な施設と大まかに分かれるのではないかと考えています。大規模な施設というのは、施設規模もさることながら、先ほどから「一級品」という言葉もご紹介いただいていたと思いますが、単体で旅行の目的になるようなものをどう捉えるかということと、あとは身近な施設ということで、地域の魅力とあわせて回ること、そこが利活用されていくものもあるのではないかと。主には、工事中、完成時、供用中ということで活用されているケースが多いのではないかと。思うんですけれども、大規模なものになると、未来を見据えた計画段階とか、あとは廃止された後というようなものを活用されているケースもあるのではないかと考えています。

以上がざっとしたイメージだったんですけれども、次のページは、インフラポータルサイトに今載っている施設について、各施設分野で、ライフステージの中でどこを紹介しているケースが多いのかというのを分類してみたものです。縦の棒がそれぞれの施設名で、左から、道路、河川、ダム、砂防、下水道、港湾、空港、自動車道、航路標識——航路標識というのは灯台です。全部の合計というふうに縦の棒をつくっています。色分けしたのが、下から順にいくと、青の工事中、赤の完成時、緑の供用中、紫の歴史的施設と今回分

けてみたものです。特徴的なのは、一番左の道路、右から3番目の自動車道も道路系で同じですが、道路系は工事をしている最中を見ていただいているところが多い状況です。完成のときとか供用後のものを見ているものもあるんですが、割合としては、工事中のものが多い。河川、ダムについては、完成した後を見せているものが多い。工事中のダムを見せているケースもありますので、お客さんの数にすると、また変わってくると思いますが、施設の数でいうと、こんな感じだということです。下水道は地中にあるものなので、完成後の姿を見せているものが多いです。今回、議論を分けて考えてはいるんですけども、特徴的なのが航路標識、灯台で、歴史的なものが多くて、明治期につくられた灯台を紹介しているケースが多いので、これが歴史的なものになっているというところでございます。施設の分野ごとに、どういうところを紹介しやすいかというのを、現在進めている事例から見てとれるのかなと考えてみたところでございます。

次は、ターゲットにするものをどういうふうを選んでいくのかということや、そうでないところも希望を持って取り組んでいくにはどういうことをしたらいいのかというところを考えてみるヒントになればなということで考えてみたところですけども、施設の特性や地域目標に応じて、レベルアップ・ステップアップをそれぞれ図っていくことができるのではないかとこのところでございます。グラフにしたもののイメージとしては、年間何人ぐらいお客様が訪れているのかというところを縦軸にしました。目盛りを1桁ずつ増えていく対数目盛りに書いています。数字が下からいくと100というのは年間100人、右に小さく書いてあるのが、年間を50週とざっくり考えたときに、週当たりどれくらい人が来るかで、年間100人オーダーのところは週当たり数名ぐらい、年間1,000人オーダーのところは週当たり20名ぐらいというような目盛りになっています。施設を大きく3段階ぐらいに分けてみたんですが、非常に一級品ということでご紹介いただいている首都圏外郭放水路をAクラスと捉えたときに、現在、年間2万人ぐらいお客様が来られているということで、グラフにすると、ちょうど左の目盛りの1万よりちょっと上に青丸のAというのをつけています。これをさらにぐっと増やしていくにはどういった取り組みをすればいいだろうか。真ん中がBですけども、事例として、ここをどうこうしていこうということではないんですが、イメージしていただけるような事例として、青森の津軽ダムが、今、年間8,000人ぐらいお客様が来られているそうなので、真ん中にBということで入れています。これが年間1万人ぐらいなので、週当たり大体200人とか、それぐらいのお客様が

来られているのではないかと。当然、ピークの時期があるので、多いときはもっと多いと思うんですけど、ベタでならずと、これぐらいかなと。ここを増やしていくにはどうすればいいか。あと、Cと書いてあるのが霞ヶ浦導水ですが、ここは今、年間600人ということなので、数百人オーダーのところを増やしていくにはどうすればいいかということで書いてみたところ。非常に大きなイメージですけども、Cのところからご紹介しますと、年間数百人だと週当たり数名なので、たまにお客様が来られますというようなところをレベルアップして、1,000人以上ぐらいにすると、週当たり20名以上になるので、コンスタントにお客様が来られます。こういうところで何を注意する必要があるかという、おそらく、施設管理者として、今まで人が来ていなかったところに人が来るようになるので、受け入れの動線とか、トイレとか、安全といったようなところをまず考え始めるのがこの時期なのではないかなと考えてみたところでございます。真ん中のBぐらいになりますと、年間8,000人なので、週当たり数十名から100名を超すようなお客様がコンスタントに来られている。これを年間万人を超すようなところになると、週末あたり数百人を超えるようなお客様が来られるということになると、やはり、施設管理者だけではなかなか対応が難しい、もしくは地域としても、これは価値があると思いつける時期ということで、こうなると、地域と連携した協議会とか、そういった体制づくりに力を入れていく時期なのかなと考えてみたところでございます。Aのところは、どんどんお客様が来られていて、これをもっと大きくしていくには、地域との連携を進めてここまで来られている施設が、さらに広げていくとなると、民間の方々もどんどん入っていただいて、マーケティングとかも生かして、数万人ぐらい受け入れていく。例えば、年間10万人にしますと、50週で割るだけでも毎週2,000名ぐらい訪れて、特に観光のピークのときには、またこのオーダーが1つ上がったたりすることもあるのではないかと。というぐらいお客様が来られるということになると、やはり、民間のいろいろな業界の方々との連携してやっていくというのはこういう時期なのかなと、大まかに考えてみたところでございます。そうではないケースも多々あると思いますので、このあたりについても、ご意見をいただければなと思っております。現状、自分たちの施設がこのぐらいだと、地域として目指していくのがこのぐらいのところまで行かせたいとしたときに、どんな注意事項を見ればいいのかというような手引きをつくっていくことで、地域として活用しやすくなるということにつながっていかないかなと考えてみたところでございます。

その次のページは、現在いらしているのはどういった方が多くて、これをこういうふうに変えていくときに、どういったところにチャレンジしていくとお客様のニーズに応じていけるのかということで、例えば、左にインフラを見たい人と書いてあるのは、要するに、ダムマニアとか、非常にコアな方々の場合は、多分、現場に行って写真を撮りますとか、そのデザイン、機能に非常に引かれていますというところが中心であったのではないかなど。一般のお客様で見ると、写真を撮るのも、格好いい写真というだけでなく、映える写真、SNS映えする写真を撮りたいと、写真のニーズも少し変わってくるのではないかと思いますし、うんちく等もさることながら、インフラカードはどっちにも行くとは思いますが、地域でどんな体験ができるかとか、インフラのことだけではなくて、地域のこともしっかり、つながりを持ったり、歴史の中でストーリーを感じたり、これをつくった人たちの地域にどんな効果をもたらしたかといったメッセージ性とか、あとは観光地としての魅力、お土産、食事、ダムカレーとかもここに入るのではないかと思います、あとは経路として行きやすいとか、地図がわかりやすいといった、非常に広がりを持っていくようなこともご紹介していくと、効果が出てくるのではないかと考えているところでございます。

これが個々の施設に対してどういうふうで紹介していくかということと、インフラツーリズム全体の認知度を上げていくときに、これまでもインフラを活用した観光ということで、道の駅とか、みなとオアシスといったものは、名前、ロゴマークが統一的につくられていて、いろいろな場面で、道路の地図に出たり、観光パンフに使われたりしながら、これはこういうグループの施設だと、分かりやすくやっていました。右は事務局の試案で、デザイン的にもどうかというものも入っているんですが、インフラツーリズムについても、わかりやすいロゴマークを統一的につくってお知らせすることで、この間ここに行ったけど、次はマークがついているここに行ってみようという方々も広がってくるのではないかなど考えているところでございます。

あとは今後の方向性として、先ほどからお話いただいています周辺とのつながりでも、やはり、インフラを中心として、人気の自然スポットとか、温泉地とか、地域の観光資源、お土産とか、いろいろなつながりをつくっていく必要があると考えていて、これまでのよかった事例をご紹介していくことも進めていきたいと思っていますのと、今回ご議論いただいている内容等をもとにして、我々としても、モデル的な取組を地域と一緒に進めてい

くことを考えてみてはどうかなのと、思っているところがございます。具体的には、その中で、手引きも活用していただきながら、実際のところ、より活用できるようなものにしていくようなことも進めていってはどうかと考えております。

今後の検討の方向性といたしまして、先ほどからご議論いただいておりますさまざまな観点を事務局として決して受けきれているとは思っていないんですけれども、今考えられる範囲で、いろいろな切り口がありますということをご紹介させていただきました。よろしくお願いたします。

【清水座長】 ありがとうございます。それでは、ただいまのご説明につきまして、ご質問、ご意見がある方、お願いしたいと思います。いかがでしょうか。

はい。

【篠原委員】 5ページでございますが、非常にわかりやすくこの段階を示していただいております、これは非常にいいなと思うんですけれども、例えばCの部分の話でございますが、施設管理者中心の取組という部分があります。全国を歩いておりますと、今回、我々が議論しているところに、何とか、ぎりぎり土俵に乗ってくれるインフラと、ちょっとそうじゃないよねという、今、各地整の管理事務所も人が少なくて、それどころではないというのもよく見えていますので、その土俵に乗る部分をまずしっかりとつくって、セグメントしなければならないと思うんです。そして、人の数が増えるという図式の中で、このような話ですが、例えばCの部分も、一例を言うと、この間、耶馬溪ダムに行ってきたんですね。九州地整で、ぜひということで視察させていただいたんですが、確かに1人の管理課長が一生懸命、弁も立つ方で、楽しくやるんですね。目的別にやっているんですけれども、ご着任何年ですか、もう2年半やっていますという話で、多分、想像によると、いなくなるわけですよ。その後の継承はと聞いたところ、その人ばかり、1人に任せっきりだったりしているんですね。いいお話なんです、例えば、社会見学用、土木の専門家用、一般観光用、彼はしっかりとセグメントしていたんですが、それがきちんと台本として整備されていないんですよ。ですから、基本的な土俵に乗るところは、ベースをきちんとつくるような話が、本省からもきちんとご指示が出ながら、整備していかないといけないと思うんですね。その後は、ガイドの仕方をしっかりと最低限学んでもらうような仕組みもつくっていかないと、底辺が上がってこないと思うんですね。そんな中で、先ほど申し上げたように、全国レベル、重点、そして重点候補といいたししょうか、このようなど

ころのセグメントがないといけないかなと思いました。

【河野委員】 同5ページですけれども、過去これまでの事例を整理された中でこのステップの図をおつくりいただいたと思うので、現状に関しては、非常によく整理されていると思います。

ただ、今後、インフラツーリズムを推進していくためには、今、篠原先生がおっしゃっていたようなすごい人、牽引する人がうまく施設管理者としていたからCの段階にいられたけど、そういう人がいないと、そもそもCが生まれないという状態が目に見えない課題としてある気がします。今はCにも載っていないけれど、最初から周りを巻き込むことで、いきなりBになれるものはたくさんありますよね。今後そういうものを増やしていくことが目的とした場合、今の整理に則ってCから始めなければいけないということになってしまうと、それが施設管理者の負担になって、Cが増えないということになる懸念があります。地域のDMOも最近増えていますし、地域の面的なマンパワーを使って、最初から地域を巻き込んでいながら始めていくことによってエンジンがかかるような地域が多く存在する可能性があります。縦軸を人数として仮に置かなかったとしたら、別の整理の仕方にもなるかもしれません。もしかしたら、Cから始めないほうがやりやすいと考える地域ともきっとあるのではないかなという気がいたしました。

もう1つは、6ページに関してです。ツーリズムの目的という、今は来られる方を主語にして分類をしてくださっていますが、今後、もし手引きをつくっていくとした場合、そして、その前のページの段階に合わせた体制強化に関することとつなげていくとしたならば、それをどう売るかというコンテンツの種別や分類という整理の仕方にも必要になります。今はこれが混ざっている状態ですが、知るとか、遊ぶとか、体験するというインフラそのものを楽しむパターンと、最後に、事例でコンサートの写真が挙がっていますがインフラを場として活用する場貸しのパターンがあります。この10月に上五島空港で星空ツアーを実施しましたが、このような場貸し的な活用であれば、管理者側としては負担が小さいので、このパターンだったらやってみようかという気になるけれど、インフラの価値や意義、その本質をみっちり楽しませるコンテンツを作っていくにはマンパワーが足りないから取組推進が進まない、といった可能性もあると思われます。今回取り上げるインフラツーリズムは、インフラをどのように使うことを指すのか。それが整理されると、参入のハードルを下げられる可能性があったり、地域のマンパワーでできること、できないことを決

めやすくなる可能性があるかと思いました。

以上です。

【清水座長】 ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。

お願いします。

【阿部委員】 1つ質問ですけど、4ページの施設分類の中で、橋梁は道路に含まれるんですかね。

【観光・地域づくり事業調整官】 一般の橋梁は道路、あと、高速系のものは自動車道ということで、このどちらかに含まれるという形で整理しています。

【阿部委員】 おそらく、たまたまここだけ目についたので質問したのですが、橋梁は道路とは見せ方が大分違うと思いますので、橋梁を個別に項目出ししたほうがよいのではないかと思います。河川についても、水門があったり、護岸があったり、あるいは河川自体であったり、もう少し見せ方、使い方に応じた分類をすれば、取組み方が見えてくるのではないかと思います。それと絡めて、先ほどから話題に上っている類型化については、あまり細かく分けても理解しにくくなりますが、まずはしっかりと、ライフステージとか、立地とか、施設分野とか、規模というので分けてみると、なるほど、こういう状況なのかと、現状の整理がつくのではないかとはい思います。

それから、5ページのA、B、Cに関する話題提供ですが、私の専門が土木史ということもありまして、現在、東京湾第二海堡のインフラツーリズムの協議会に入っております。第二海堡は、5ページの分類でいうとおそらくAに位置づけられると思います。第二海堡は東京湾の真ん中にある施設でして、ツアー船が出るのは横須賀市からですが、底地は富津市です。そうしたこともあり、横須賀市と富津市の両市が連携して、第二海堡をいわば客寄せパンダにして、観光振興を図ろうとか、地域振興を図ろうという動きが出てきております。

東京湾第二海堡のインフラツーリズムで、何が一番大きく変わるかということ、船で行きますので、観光の動線が変わります。さらに、その船は、結構酔うんですね。そうすると、船で戻ってきても酔いを覚ますまですぐには帰れないということで、ツアー参加者の滞在時間が延びて、そうするとだんだんおなかもすいてくるでしょうから、海堡井や海軍カレーといった地元の食事を提供したりしてはどうかといった、いろいろなアイデアを考えて、楽しみながらやっております。つまり、Aに位置づけられる施設については、インフラを

客寄せパンダのように使って、地域で儲けようとか、活性化しようといった取組も考えられます。一方、頑張らなければいけないのはBやCです。おそらく、霞ヶ浦のCが悪いわけではないのですが、週に2人しか来客が来ないとすると、社会科見学ですらうまくいっていないのではないかととらえられかねません。こうした施設では、なぜインフラツーリズムに取り組まなければいけないのかと、思っている管理者の方も多いのではないかと推測します。たとえば、インフラツーリズムの目的が、きちんとインフラの役割を周知するというのであれば、管理者の方もそれはやらなければいけないと、思っただけなのではないかと思いますが、Cに関しては、そうしたところからきちんと始めていけば、いろいろ変わってくるのではないかなと思います。

地域連携という観点では、おそらく、インフラツーリズムはすごくやりやすく、インフラというのは、もともとシステムやネットワークの構築を前提として整えられています。つまり、インフラのネットワークをたどるだけでも地域連携になりますし、ダムへ行っても、ダムだけ見るのではなくて、水源や導水路、発電施設といったシステム全体を見るだけでも十分時間が使えます。インフラだからこそ観光という観点からすると、コンテンツというか、何を伝えるべきかというのを踏み外さなければ、BやCであっても、急には伸びないかもしれませんが、少しずつ地に足がついた取組が膨らんでいくのではないかと、思っております。

【清水座長】 ありがとうございます。私も関係する話ですが、先ほど河野さんから、縦軸が人数という話がありました。最近の行政は、よく人数を目標に立てますよね。すごく意地悪な言い方をすると、50万人というのは、施設あたりで平均すると1,000人程度なんですよね。先ほどの分類ではほぼCなんですよね、平均が。もう少し細かく見ていくと、そもそもBがどのくらいあるのかも気になります。実は、人数の面でいうとかなり悲惨であると思うんです。

最近、観光庁でも、人数の目標とかいろいろあるんだけど、人数だけでいいのかとよく言っているんですね。例えば、人数が増えても滞在時間が減ることもありますし、そもそも、今回、インフラツーリズムの理念があったときに、必ずしも人数ではないよねという整理もあるかもしれなくて、認知が増えるとか理解が増えるというのも、多分、理念の1つだと思うんですよね。目標を立てなければいけないのはしようがないとして、一方でそこに拘泥しないのもありだと思うんですよね。多分、インフラツーリズムが持つべき

理念に合わせたときに、もうちょっと違う切り方もあるだろうなど。人数を増やそうと思ったら、はっきり言うと、他の資源と組み合わせるコバンザメ作戦で幾らでも増えるんですよね。それがほんとの望むべき姿かどうかということですよ。さりとて、多分、BやCだったら、ほぼ単体で食えないところなので、人数はそういう形で増えるにしても、むしろ違うところに目指すべきものがあるのではないかなと思うんですよね。

それから、あとはロゴマーク原案について、もうちょっと、人とか地域が見えるといいなという感じがしないではないね。例えば、右側の図案だとインフラだけしか見えない。インフラツーリズムを全体的に示すためにしても、もうちょっと違う発想があっても良いのでは。あとはごちゃごちゃして見えるので、もうちょっと簡素化できないかと思います。時間的な都合もあると思うものの、作るならきちんとやったほうがいいと思うので、あまり拙速にやらないほうがいいかなと思います。

あと、ガイド。行政の宿命で人が変わる。でも、インフラツーリズムは、インフラ部分の説明をどうしてもそういう方をお願いしないといけないこともありますね。民間の語り部がガイドしたときに、全体としてはコーディネートできるかもしれないけど、インフラの部分については担当者でないから迫力がないかもしれない。ひょっとしたら、例えば、マニア的な人が来るような場合と、いわゆる普通の観光客でテーマの中の1つの要素としてインフラがある場合で、ガイドは誰がやるべきかが全然違うかもしれないし、説明すべき内容も全然違うということですよ。だから、手引きの中では、こういう需要に対してはこういうガイドをお願いして、というレベルで示さないといけないですね。

【篠原委員】　今の清水先生のお話は、私も非常に納得するわけでありまして、確かに6,000万人のお客さんと呼ばばいいというものではなく、どこの国のどういう方が欲しいのかということ、今、観光庁でも悩まれておられると思うんですね。

基本的に、インフラツーリズムで地域活性とつなげていこうということが、治水とか防災をPRするということはもちろんあるものの、今後は、やはり地域創生とか観光の誘客にもつなげていきたいということが趣旨だと思うので、最低、Bのような体制をきちんとつくっていかないと、これは公務員の皆さんの宿命で、人のパワーでみんなつなげていたものが、みんな切れていっているんですね。だから、迫力を出す問題もあるんですが、まずはきちんとした地域の中で協議会など、強弱はあったとしても、きちんとつくる体制を仕組み、システムとしてつくっていかないと、今までのことの繰り返しになるのだろうか

と思いますね。

ガイドの方向、目的別によって違うわけですが、篠原資料の一番最後のページをもう1回、見ていただきたいんですね。個人向けと団体向けに分かれていまして、一般的なツアーは、コンシェルジュとあって、比較的若い地元の女性がダムを一生懸命勉強して、認定制をとっています。最低限クリアしないと、ダム所長からの認定書が出ないんですが、今、これを地域の方々にも広げて、何と川原湯温泉の若い人たちが認定書をとるために勉強しているんですね。この上の2つございますけれども、今、500円ずつ取って、何と、あれだけ反対していた地元の人たちがダムを案内するようになったんですよ。おとといやったとき、100名来たんですね。夜やるんです。川原湯温泉に泊まらないと見られないんですけども、地域創生とお金が落ちるような仕組みをしっかりとつくっていかないと、今後、我々が力を入れてやっていく流れが、何か浮ついてしまうのかなと思いますね。

【清水座長】 そうですね。多分、インフラのところにはお金は落ちないと思うんですよ。なので、周りに落ちるといふふうにしないと……。

【篠原委員】 落とす仕組みを合わせていかないといけないですね。

【清水座長】 仕組みをね。地域の最終的な理解はなかなか得られないというか。やっぱり、インフラツーリズム、インフラ自体が地域観光に貢献していますというようなストーリーが多分、Aはともかく、BやCには必要だと思うんですよ。

【篠原委員】 もう1つ、全国ガイド、観光ボランティアガイド、いろいろいるんですけども、今回、インフラツーリズムを立野ダムでやったときに、ダムの所長は非常に熱い方なので、言いたいことがいっぱいあるんですね。ですから、どうしても説明を短く、この場所で15分と言っても、どんどん入って行ってしまって、観光で来ている人たちは、その話がなじまないんですよ。今度、ジオパークのガイドさんは一生懸命なので、その話があるんですが、全然、融合できなかったんですね。今回、学生を入れていろいろやったんですけど、学生からの提案で、こんなことになったんですよ。最終的に、NHKの人気番組の「ブラタモリ」ってあるじゃないですか。「ブラタモリ」は、地元の有識者が来まして、そして、タモリがいて、あと、新人のあんまり知識がないようなアナウンサーがいるんですよ。ガイドが説明してしまうのではなくて、質問をしますでしょう。ガイドが質問して、答えて、わからなくて、おもしろく回っているんですが、今回は、シナリオをきちっとつくって、現地で予行練習を重ねながらやったんですが、これはばちっとおさまっ

たんですね。だから、それも1つ、今後、ダムとかインフラだけではないんですが、観光庁全体のガイドの育成というのも、そういう工夫をしていかないといけない時代だと思いますから、ぜひ、アウトプットのときには、その辺も大事だろうと思いますね。

【清水座長】 ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。

はい、お願いします。

【河野委員】 ガイドの話については、インフラに限らず、今、物見遊山から体験観光にという市場の流れの中で、どの地域でも一番難題として上がっているものです。インフラに限らず、マニアックと言ったら失礼ですけれども、説明を聞かないと、ぱっと見ただけではわかりにくい資源に関しては、顧客タイプに合わせたガイドタイプやスキル段階を用意しておくことが望ましいねという話は各地域で耳にします。

長崎の池島では、その炭鉱で昔働いていた企業OBが案内をしてくれますし、夏しかやっていない小谷の砂防のツアーは、あれも砂防事務所のOBが説明してくれることによっておもしろくなっています。五島列島のガイド付きの教会を回る着地型ツアーは、やはり、信者さんである人がガイドするのと、そうでない人がガイドするのでは、質の違いというか、すごみが違いますし、スキルレベルによっても満足度に差が出ます。ガイドの質や知識レベル、伝えたいことをどのように設計し、人を育成するかということも、今、検討の余地があるところではあります。ただ、どこの地域でも課題になっているのは、最初、ボランティアガイドから始めて、それを有料ガイドに育てていこうとするのがなかなかうまくいかないということです。ボランティアガイドさんは地域にとって非常にありがたい存在ではあるんですが、篠原先生がおっしゃるとおり、自己満足のためにしゃべってしまう方が発生します。無償である分、厳しく育成できないという地域の行政側の立場もあり、半分の長さにしてよとか、この話ではなくてあの話をしてよという要望や指導がなかなか徹底できません。最初から有料を見込んでガイドを活用していくことをベースにしておいて、それでもだめだったら、ボランティアの活用も推進していく、というようなスタンスの基準をどこに置くかというのを最初にイメージしておいたほうがよいと思います。地域にとって、観光は経済効果や雇用に貢献できるという効果もありますので、ボランティアに頼り切らないで済む方法をベースに置きながら、手引きを作成したほうがいいのかと思います。

あと、先ほど阿部さんから資源の分類の話がありましたけれども、私もこの河川につい

てはいつも困るんですけれども、最近は「ミズベリング」という単語が生まれていて、水辺でにぎわいをつくって、河川の隣で何かできる滞在の場や境界をつくるような活動を指します。このような水辺空間活用の話が、最近は都市計画、特に観光まちづくりの文脈の中でよく行われていますが、それは今回取り扱うインフラ活用に入るのかというのは悩むところです。確かに、河川という場所で人が滞留し、そこでお金を落とすとしてくつろいで、場合によってはイベントもできる場として活用できるので、広義では確実にインフラツーリズムに入ってくる話です。先ほどの場とコンテンツの話ではないんですけれども、「河川」というインフラ種別ごとの整理の仕方では、見えてこないもの、整理しきれないものがあるように思います。そうすると、分類が非常に難しくなってきます。訴求力ランクの問題と管理者の問題、また立地環境や周辺観光資源の問題など、幾つかの軸で全部分類をしていくと細かくなり過ぎてしまいます。とはいえ、手引きを読んだ方々が、自分のところにあるあのダムは、あの橋はどのタイプに該当するんだ、そのタイプの資源はどうやっていけばいいんだ、ということがわかるような整理ができると望ましいです。例えばの1案ですが、若い女性が読むファッション雑誌などに、質問を辿ってYES/NOで進んでいって、何らかのタイプ分けをするページがありますよね。同様に、あなたの地域のインフラは、誰が見てもその形だけで格好いいと言えますか、イエス、ノーみたいな感じで進んでいって、体制の話や周辺環境の話などを織り込んでいき、では、あなたの資源は〇〇タイプなので、何ページから読んでください、というような整理になっていると、ある程度、自分で何パターンかシミュレーションをしていくことで、自身の地域のインフラのポジションが客観的にわかっていくかもしれません。地域の方々にとって理解しやすい、感覚的に理解できる整理の仕方というのをお勧めしたいなと思います。

【清水座長】 ありがとうございました。

はい、お願いします。

【阿部委員】 インフラツーリズムを現場で誰が引っ張っていくのかというのは非常に重要な課題だということを、先生方のお話を聞いて、改めて認識しました。私、国交省の入省2～3年目のキャリア向けの土木技術者研修で、1時間程度、土木の歴史を中心として講義をしているのですが、そこで「インフラツーリズムを知っていますか？」と聞きますと、知っている人が1割もおりません。これも、検討すべき一つの課題ではないかと思えます。

また、振り返ってみると、私が大学を出たのは 20 年ぐらい前ですが、インフラ施設について説明するような教育というのは受けていなくて、プレゼンテーションするというのは、卒論の発表会で初めて経験したような記憶があります。そうしたインフラの役割を広く伝えるというトレーニングは、ほとんどしてきませんでした。

現在、私がいる学科では、演習科目で学生にプレゼンさせると、私が学生時代のときより、よほど上手にプレゼンをいたします。おそらく、少しずつ、人に伝えるためのプレゼンテーションのできる若い人というのが増えてきているのではないかと実感しています。そこで、やはり先生方がどこかのインフラツーリズムのサイトに行って人材育成するというのは 1 つの方法としてあるにせよ、そうすることのできないところも多数あるわけで、インフラツーリズムの対象とする 400 カ所の中で、専門家が全部張りつくわけにはいかないでしょうから、まずは管理者の方がアクションを起こす際に、プレゼンテーションをする技術ですとか、あるいはガイドを育成する技術というのも、これからのインフラの管理者に求められてくるのではないかと実感しております。さらに、教育に携わる者としては、こうしたことも重視していかないと、インフラツーリズムの底辺が上がっていかないなどというのがよくわかりました。

だからどうすればよいのかという解決策はないわけですがけれども、地道にやることと、今やっておかなければいけないことというのは仕分けが必要かと思います。長期的にやることと、すぐやることというのは分けて考える必要もあると感じました。

【清水座長】 ありがとうございます。

提案の類型も、今はどちらかというとサプライサイドの都合になっていますよね。ですから、ダイヤモンドサイドからの切り口も、複雑になってしまいますけど、クロスをかける意味があると思います。さきほどのミズベリングや、大阪でやっているような取組というのは、インフラツーリズムといえばそうなのかもしれないけど、ただ、参画している人たちは、そういう意識はないかもしれないですよ。多分、こういう例はインフラツーリズムではないような気もするんですけども。では、どういう基準でそういうものを外していくのかは、かなり難しいですよ。

さきほど場貸しという話がありましたけど、結局は場貸しなんですよ。場貸しみたいなものをインフラツーリズムというのかどうかはかなり微妙になってくるなと正直思ったところですね。多分、こういうものは検討の対象から外すんだろうなと個人的には思って

います。そういうケースは勝手に市場で動いているし、いろいろな人の思惑で動いているので、そこは放っておいて、あえてインフラツーリズムと声高に言ってやらないと動かないようなところが対象なんだろうなと。ミズベリングで動いているところは、ひょっとしたら、かなり高いBとかAというステージにいるはずですよ。

それから、人材育成も。今、研究室の修論で、学芸員がいるじゃないですか、博物館に。そういう人をどうやって地域の観光で生かすかというのを考えてもらっていますが、それと全く同じ議論なんですよ。結局、話の上手な学芸員がいるとオールオーケーなんですけど、必ずしもそうではなくて、学芸員の中には観光なんかに関わらず専門的にやりたいという方もいらっしゃるし、高校の先生になったりとか、大学の教員になったりする通過点として働いているケースもあって、地域に定着しないこともあったりして、それと全く同じ構図だなと思ったんですよ。インフラも観光周遊の中の1つの資源であるという切り口は変わらないので、インフラが周遊コースの中で重要な意味を持つときに、そこに携わる人というのをどういうふうに育てるかは、かなり重い課題だなと、阿部先生のご発言を聞いて思いましたね。

【篠原委員】 おっしゃるとおりだなと感じるわけですけども、ですから、成功事例をある程度つくっていかなくてはならないと思うんですね。全国モデルというものを定めて、専門家が総合的にプロデュースして、地域の方々も参画しながら、ガイドの仕組みもきちんとできるようにしていくという、これが幾つか全国の各地で出てきたりすると、みんな目指すポイントというか、マニュアル的なものが出ていったときに、みんなが視察に行きながら学んでいくというか、やっぱり、モデルをつくっていかなければならないのかと思いますね。

【清水座長】 そうなんですよ。地域も担い手が限られている中で、最近いろいろなところから人材育成しろというプレッシャーがかかるんですよ。だけど、みんな似たような人材育成講座をやっていて、すごい無駄ではないかなと。私は今、これらを交通整理したいと思っているんですけども。そういうとき、例えばガイドも、こういう向きのガイドとか、きちんと戦略的に細かく分けていったときに、インフラツーリズムにも何かの形で講座が提供されていないといけないなという話だと思うんですよ。今回このレベルまで考えるかですが。

【河野委員】 成功事例をこれから整理されていくにあたって、今、インフラツーリズ

ムそのものが成長途中なので、インフラツーリズムのテーマの中だけで成功事例を集めても、多分、抜け漏れが出てくると思います。先ほどの学芸員の話もそうですが、動物園、水族館の飼育員も、今、同じガイドとしての課題を与えられているような状況にあります。似たような施設といいますか、ジャンルは違うけれども同じ課題を持っている施設なりテーマなりというものはインフラ以外にも多くあって、そういうものたちの中から、インフラツーリズムに当てはめても、非常に参考になる成功事例というものが出てくるのではないかと考えています。インフラツーリズムではない部分から新しい視点を取り込んでいかないと、今までのインフラツーリズムがやってきたものの延長線にしかならないかもしれません。先ほど来ずっとお話にありました理念に照らして、インフラでない分野で、これは格好いいという成功事例をよその分野から探して持ってくるというのは、おもしろい取組になるのではないかなと思います。

【清水座長】 ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。

我々、一方的に言ったんですけれども、事務局のほうで、いかがですかね。

【事業総括調整官】 貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。事務局としても、考えられるだけ広げてみようと思いつつ、たたき台をつくってはみたんですけれども、やはり、先生方のご意見をいただくと、この外側にもっと大きな世界が広がっていくべきだと思いましたが、あとは、細かく分けていく中で、結局、ユーザーとして見た人が使いやすいような受け取り方の工夫も、先ほどのフローチャートの的にするとか、そういったのも要るなというのを感じたところがございます。また、いろいろな施設を活用して地域を盛り上げていっているという意味で、ほかの類例をあわせて参考にしながら進めていってはどうかということも感じたところがございます。幅を広げていくときの体系立てる立て方と、あとは、何を目指していくのかという目標の立て方をもう少し検討した上で、また、ご議論いただくといいのかなと感じました。

【観光地域振興課長】 観光側、ツーリズムという側から、やっぱり、スタートはインフラ側から来ていますので、インフラに対する理解をいかに深めるかというのがまずは頭にあって、「見学」という言葉が出てきています。

一方、ツーリズムという側から見ると、今、いろいろな観光立国で進めていて、地域に眠っているというか、これまで使われなかったような資源をいかに観光に使っていただくか、その間にあるんだろうなと思います。

今、お手元に出ているような今後の方向性というところで見ると、例えばCみたいなところは、理解を深めるために、管理者がいかに工夫をして、どれだけ来ていただけるのか、そういうところが目標になって、いわゆるツーリズムというところとは、ちょっと遠いのかなと。

一方、BとかAは、活用していただくためにどういうことができるのかというのを考えないといけないだろうなと思います。

では、そのときに何を目標に置くのかとか、どういう形で進めるかということを見ると、やっぱり、ツーリズムの側で考えると、地域に経済的にも活性化という面でもどれだけメリットがあるのかということが出てきます。

あと、単体だけ、インフラの側からだけでほんとにできるのかというのが少しあって、8ページをごらんいただければと思うんですけど、このイメージだと、まずはインフラ側がしっかり頑張っ、それを周りに広げていくというイメージなのかなと思います。そういう本当の一級品、エース級であれば、こういうこともあるのかもしれませんが、むしろ、地域の中で、ここはどういうお客さんが来ている、どういお客さんをこれから目指したい、どういうルートでやりたいというところがあって、その中にはめてもら、そういうことも必要なのかなと思いますし、あと、あえて言えば、1つの地域の中でなくても、連携して、例えば、ちょっと話は違いますが、アニメツーリズムというようなものもあります。全国のアニメみたいなものを関連する聖地めぐりみたいなものもあります。多分、そういう売り方もあるだろうなと思いますので、そこは少し柔軟に、手引きにするときも、地域との連携とか、同じような施設の連携というのも考えながらやったほうがいいだろうなと思いました。

その意味からいうと、7ページのインフラツーリズムだけで何か、それ全体をつくるというよりは、少し興味のある、ここを回ってみようというもの単位で何かつくるというのが効果的ではないのかなというのを感じました。

済みません、少し長くなりましたが、以上です。

【清水座長】 ありがとうございます。いわゆる、これでAに相当するところというのは、もう出尽くしている感はありますか。

【観光地域振興課長】 まだあると思います。

【清水座長】 手引きでどこに訴えかけるかを考えるときに、仮にAはほぼ出尽くして

いて、これ以上はなかなか難しいのであれば、最初からBを目指して作るという方法もあるし、Aがまだ埋もれているんだったら、Bもにらみつつ、まずはAを念頭に置くことも。作業時間も短いので、きちんと詰めるところですけど、Aがまだ出尽くしてなくて、やっぱりAだというのであればAだし、Bみたいなところを巻き込んでやるといったときはBを目指したつくり方になるし。今、畠中さんのおっしゃっていたようなところを踏まえると、そういう整理もいいかなと思うんですよね。

【篠原委員】 今、畠中課長のお話を受けて感じたことは、全部のインフラ、国交省直轄のインフラを対象とするのは当然無理だと思うんです。あと、私の中で答えが出てしまっているのは、インフラ単品で、なかなか集客といっても、これは限度が見えてきているように思うんです。今までは、ダムマニアや土木マニアだの、皆さん、世界から脱しないと思うんです。だから、一般観光とどうやってつなげていくかという、先ほどの8ページの図のようなことをきちんとつなげていくということをしなければならぬと思います。ですから、今回のマニュアルといいたほうがいいか、それは、もちろんCの啓蒙はするものの、B以上のものを具体的にやっていくというように絞っていかねばならないかと思えます。

それから、今、清水座長から、Aは出尽くしていますかという話があったんですが、私から言わせていただくと、ちょっと工夫して、こうすれば、もっとお金が取れるよねとか、あるいはBでここまでできているけれども、まだまだ甘いなというのがたくさんあるんです。ここをきちんと油を塗って滑るようにしてあげたら、多分、Aも増えていくし、Aのレベルも上がるだろうとは思っておりますので、その辺を絞ってやらないと、総花にはならないのではないかと思います。

【河野委員】 今のお話の中で思ったのですが、ツーリズムの観点から考えたときに、8ページを見たとなると、ここにコンサートの写真があるように、場貸しをすることによって、そこに一泊するのであれば、面的な経済効果が見込めるから地域として連携して取り組んでやってみよう、という考え方になる可能性もあります。インフラツーリズムのうち、インフラそのものにスポットを当てていく取組を振興していくという思いをゴールにするのか、それとも地域の手引きを読む側に、当地域の観光経済全体を活性化させるためのインフラ活用というツーリズムの論点のほうをベースとするかによって、場貸しを取り扱うか取り扱わないかという考え方も変わってきます。そのあたりから検討をスタートし

ていって、仕分けとか、A、B、Cの段階とかを考えていかれるのがよいのではないでしょうか。

【清水座長】 ありがとうございます。阿部先生、何か追加でございますか。

【阿部委員】 では、一つだけ。手引きは誰向けに出すご予定ですか。現場の人なのか、地整レベルなのか、あるいは地域の人なのか。

【観光・地域づくり事業調整官】 現時点では、まずは施設管理者というところの展開を一度念頭に置いてございます。ただ、本日いろいろご意見をいただきましたので、その件も含めて検討はしていきたいと思うんですが、まずは施設管理者が、先ほどからお話があるような、自分のレベルだったり、いろいろな可能性だったり、そういうところが全然わからないところが多数ございますので、まず、そういうところに広めるということから始めると。

【篠原委員】 もちろん施設管理者にもですけど、そこの中に、やはり行政の方との連携の可能性という部分、そこは管理者と行政がきちんと読んで、共感できる内容でないといけないかと思えますね。

【阿部委員】 私、国総研にいたころに、手引きやガイドラインを作成しましたが、研修会などでそれらを読んだことがありますかと聞くと、大体、読んだことはない。そうならないように、管理者向けであれば、かゆいところに手が届くようなものにする努力を私もしたいと思えますので、よろしく願います。

【清水座長】 ありがとうございます。ちょっと関連するので、資料4だけ、簡単にご説明いただいて、また追加で議論したいと思います。

【事業総括調整官】 資料4につきまして、ご紹介させていただきます。今後のスケジュールでございます。本日が1回目ということで、これまでの取組、課題、今後の方向性について、今、非常に貴重なご議論をいただいているところでございます。

第2回目を12月から1月ぐらいに、一度、今回お受けさせていただいたものを、風呂敷を思いっきり広げさせていただいたので、その中のどの部分を今回たたんでいくのかということで、また、短期、中期、長期とか、そのあたりで、スケジュール感もさらに持たせながら、一度ご提案させていただくのを第2回としたいと考えております。今年度のまとめということで、2月から3月に向けて、特に今年、今年度のうちにやっていくべきことということでのツーリズム拡大に向けた取り組みのあり方ということで、先生方にまとめ

のご提言をいただければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

【清水座長】 ありがとうございます。かなりタフですね。今日も思いっきり風呂敷が広がりました。感触として2種類。1つは、どうしても事情があって管理者向けということであれば、例えばBのタイプみたいなものを念頭に置いたときに、管理者は何をやらなければいけないか、どういうところまで発想を広げなければいけないかという観点のもの。

それからもう1つは、今後どういうところまで我々の発想を広げなければいけないのかというところ。こちらは、多分、手引きには全然そぐわないですね。検討のアウトプットは、2種類の性質の違うものが必要だという感じが、今日の議論を無理やり取りまとめるとすると、よろしいのではないかなと思いましたが、いかがですか。多分、管理者向けに何かやらなければいけないという行政の事情もありそうなので、そこはやっていただくとして、それ以外に、せっかくいろいろな議論が出ましたし、今後、別の〇〇ツーリズムを検討するときにインフラツーリズム検討のエッセンスが役立つかもしれないと、横展開できそうな気がしますし、民間側がある意識を持って興味をもってくれるように、使える提言のようなものを出していく必要があると思いました。

おおむね時間で、議事は一応終わったんですが、何か追加でコメント等ございますか。

【阿部委員】 大丈夫です。

【河野委員】 大丈夫です。

【清水座長】 それでは、以降の進行は事務局にお返しします。よろしくお願いいたします。

【観光・地域づくり事業調整官】 清水座長、円滑な議事進行をいただきまして、ありがとうございます。また、委員の皆様には、長時間にわたるご議論をいただきまして、本当にありがとうございます。

それでは、第1回インフラツーリズム有識者懇談会の閉会にあたりまして、総合政策局公共事業企画課調整課長の丹羽より、ご挨拶申し上げます。

【公共事業企画調整課長】 公共事業企画調整課長の丹羽でございます。

本日は、非常に活発なご議論をいただきまして、ありがとうございます。今日は、インフラツーリズムのこれまでの取組と課題、今後の方向性をご議論していただきました。非常に示唆に富んだ、いろいろなご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。

次回、中間取りまとめはなかなか大変なことになったなと思っていて、とりあえず

頑張って、取りまとめのイメージなるものを次回ご提案させていただいて、それについて、また、いろいろなご指導をいただければと思っております。本日は、本当にありがとうございました。

【観光・地域づくり事業調整官】 ありがとうございました。

本日の議事概要につきましては、後日、事務局より各委員の皆様へ確認をとらせていただきまして、その後、ホームページへ掲載させていただく予定となっておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、以上をもちまして、第1回インフラツーリズム有識者懇談会を閉会させていただきます。本日は、本当に活発なご意見をまことにありがとうございました。